

2019年4月6日 青山零「EUの政治経済危機」

●主催 世界資本主義フォーラム

●日時 2019年4月6日(土) 午後1時30分～5時 (受付開始 1時)

●会場 本郷会館

●講師 青山零

●テーマの趣旨 EUの政治経済危機

2007金融危機から10年、その影響は、ヨーロッパに深刻な危機をもたらしています。英国のEU離脱は、英米連携を大きな支えとしてきたパクス・アメリカーナにとって、手痛い一撃です。その中で労働党コービン党首の「社会主義」が注目されます

ギリシャのチプラス政権は、EU委員会の要求に対して「緊縮財政拒否」と明言し、ユーロ離脱やむなしと開き直っています。EU経済の現状は、もはや「まじめに働くアリのドイツ」対「怠けて働かないキリギリスのギリシャ」という構図では捉えられなくなっています。資本主義を越える経済的枠組みを必要としているようです。

既成政治勢力の衰退・第三勢力（ポピュリズム）の台頭がヨーロッパ各国を覆っています。右派勢力の台頭を制して労働党に代わって登場した仏マクロン大統領も、黄色いベストの反乱に立ち往生しています。EU内の経済格差・移民流入・米トランプ大統領の「アメリカ第一主義」外交といった難問に対して、EUを牽引してきたドイツ・メルケル首相も、対処できなくなっています。世界資本主義編成に対するヨーロッパの立ち位置の再検討が迫られています。

ヨーロッパの政治的経済的危機を分析することによって、パクス・アメリカーナの流動化のゆくえを探る手がかりとしたい。

●青山報告

統計データで読み解く EUの政治経済的危機

世界資本主義フォーラム 2019年4月6日 青山零報告

【報告要旨】

サブプライムローンデフォルトを発端とする世界金融恐慌はEU圏にも当然のことながら波及したが、その対応をめぐって生じた財政赤字の急増が持続不可能な構造的なものとして受け止められ、ギリシャ財政の粉飾と国債ディフォルトに直面してソブリンリスク危機の形で爆発、EU圏だけに止まらず世界金融恐慌直後の資本主義鶴国に波及した。そこでは財政緊縮を通じて一層の景気下降圧力が高まった。

EU 内では、財政基盤が脆弱とみなされたいわゆる PIGS 諸国に著しくこうした圧力が加わったが、フランス・イギリスなどの基軸国でも、緊縮財政や構造改革が不可避のものとされ、そこに移民問題も深刻化することで、様々な不協和と軋轢が噴出してきている。

本報告では、まず統計データでもってその動きを追跡するとともに、EU という個々の国家の主権を存続させたままでの連邦制と統一通貨としてのユーロの制度的矛盾、そこに外接的に参加したイギリスの立ち位置などを俯瞰して、EU の政治経済的危機の全体像に迫りたい。

*統計データーの出所はすべて OECD 主要統計 <https://www.oecd.org/tokyo/statistics/>

【世界金融恐慌の第 2 幕 欧州ソブリン危機の勃発】

図 1 : PIGS 危機は 2011-2012 年 (図 2)

図 2 : 2009 年世界金融恐慌波及への対処に迫られ、失業給付急増などで財政赤字急増。

ギリシャ国債デフォルト懸念が高まる。

財政赤字の大きな国のソブリンリスク懸念が拡散。世界的な財政緊縮へ。

PIGS 諸国の国債利回り急騰 (額面下落)。

ギリシャ・ポルトガルには IMF/ECB、独仏などが緊急流動性供給。

図 3 : イタリア・スペインは規模が大きすぎて緊急支援不可能。"Too big too save"

ECB が「条件付き無制限流動性供給」を宣言して、イタリア・スペイン国債利回りはようやく落ち着く。

図 4 : 不況下に緊縮財政を強行。失業率の急増。2013 年が最悪期だが、その後も高止まり。

財政赤字は 2% ガイドラインをほぼクリア、ギリシャはなんと黒字化。

図 5 : 経常収支も急速に改善、ギリシャ除いてこれまた黒字化。ギリシャも赤字ながら米・英にまさる。輸入削減=国内消費抑制と対外利払いの削減=債務の内国化。

財政健全化、経常収支改善は、アジア通貨危機など国際金融危機に際しての IMF 支援条件の定番だったが、EU 内基軸国と ECB が世界金融危機による景気後退時に強制したことで、完全な不況とその長期化が根を下すとともに、PIGS 諸国に EU 本体への反発を醸成することとなった。反対から見ると PIGS に代表される経済基盤脆弱国を足手まとい視する傾向が生じた。

国内均衡の追求=失業の解消と金融危機突破スキームとの離反。EU 内に不協和音が流れ出す。

図 1

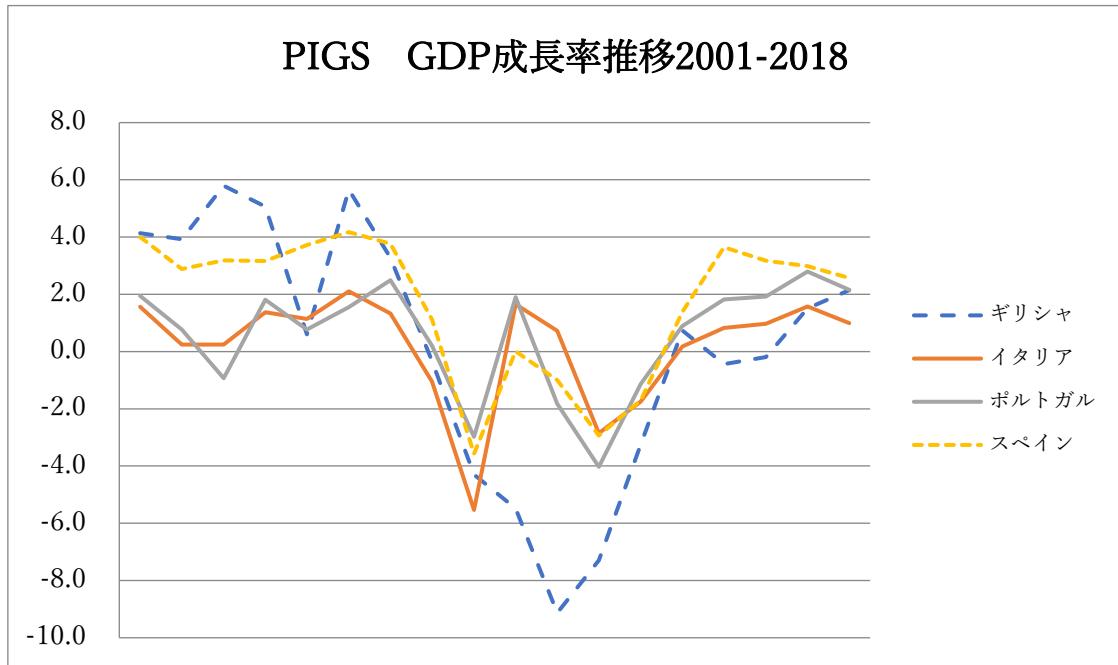


図 2

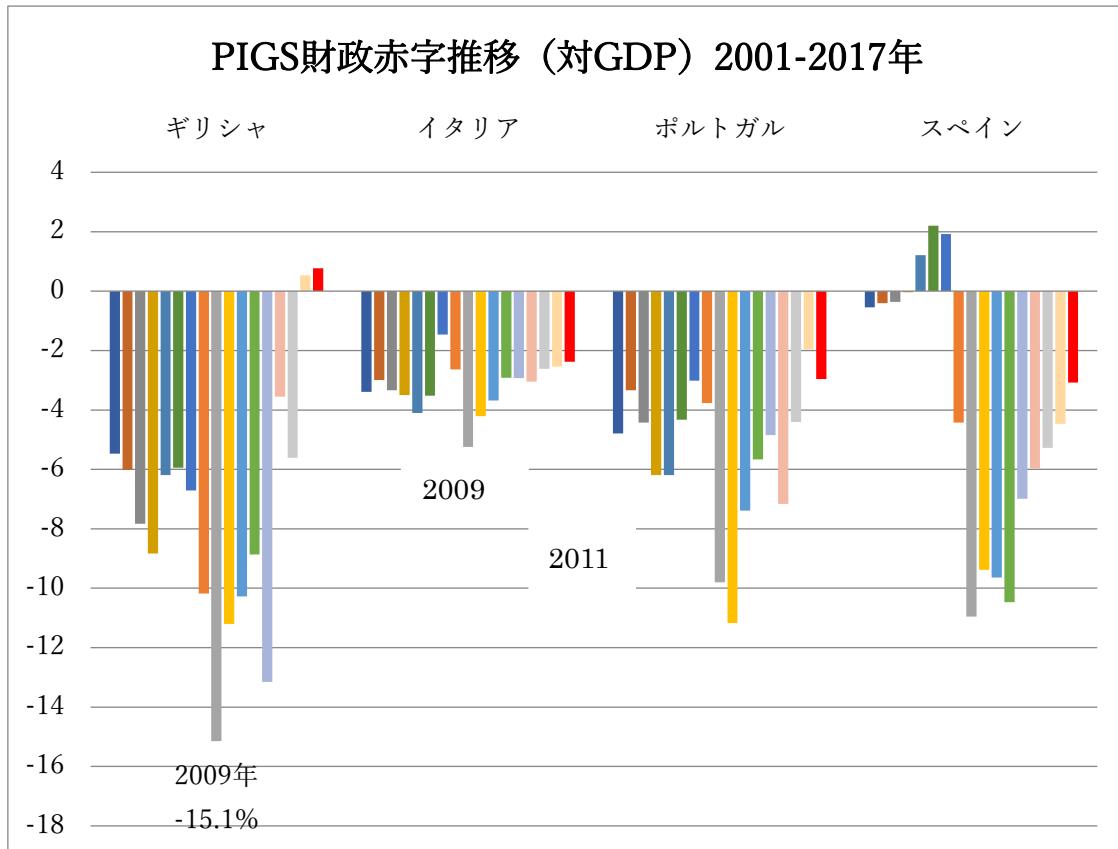


図3

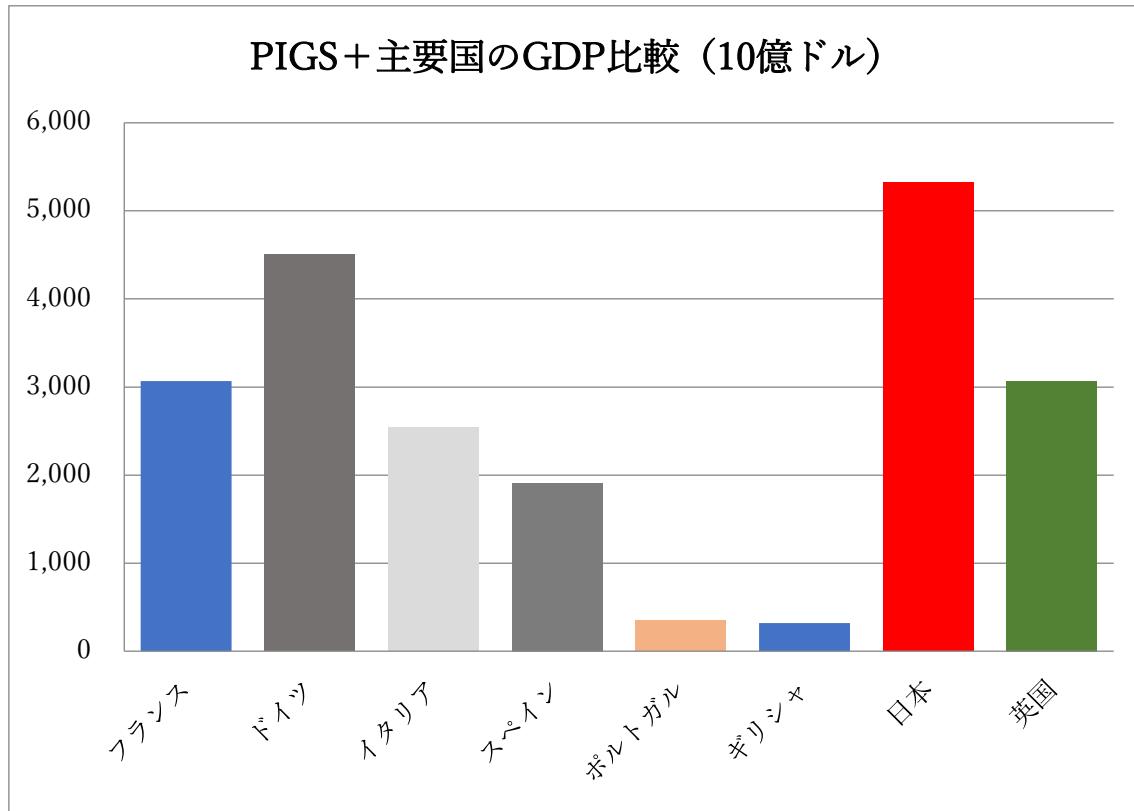


図4

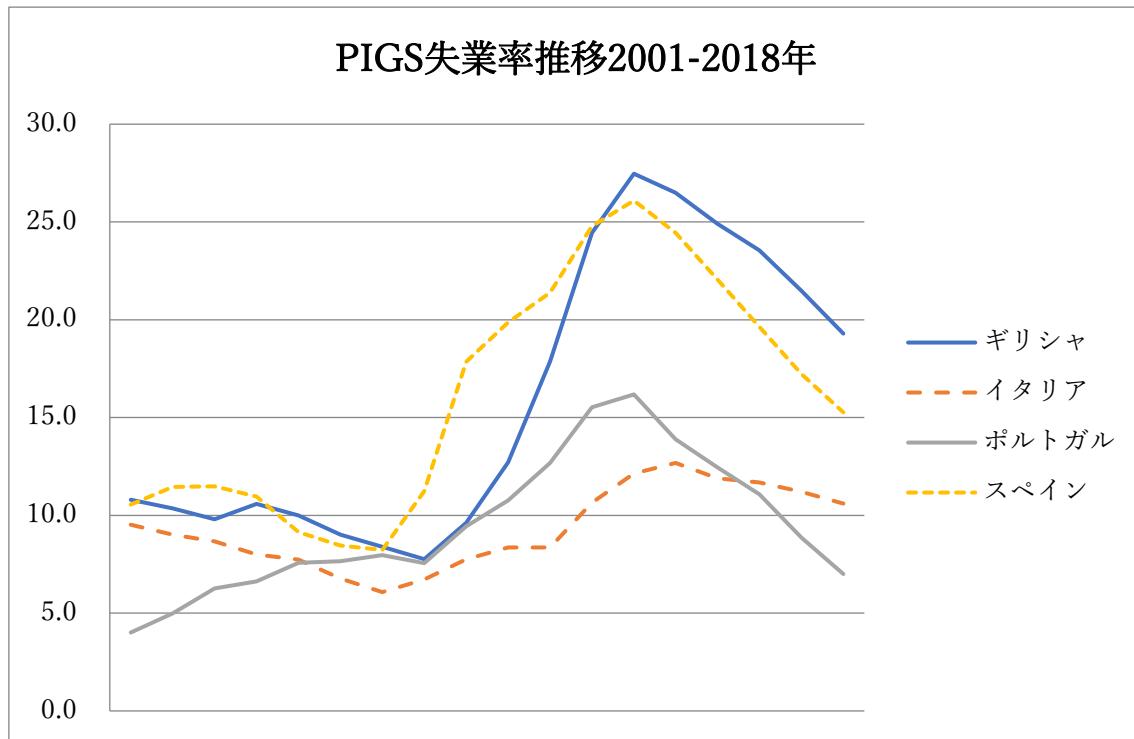
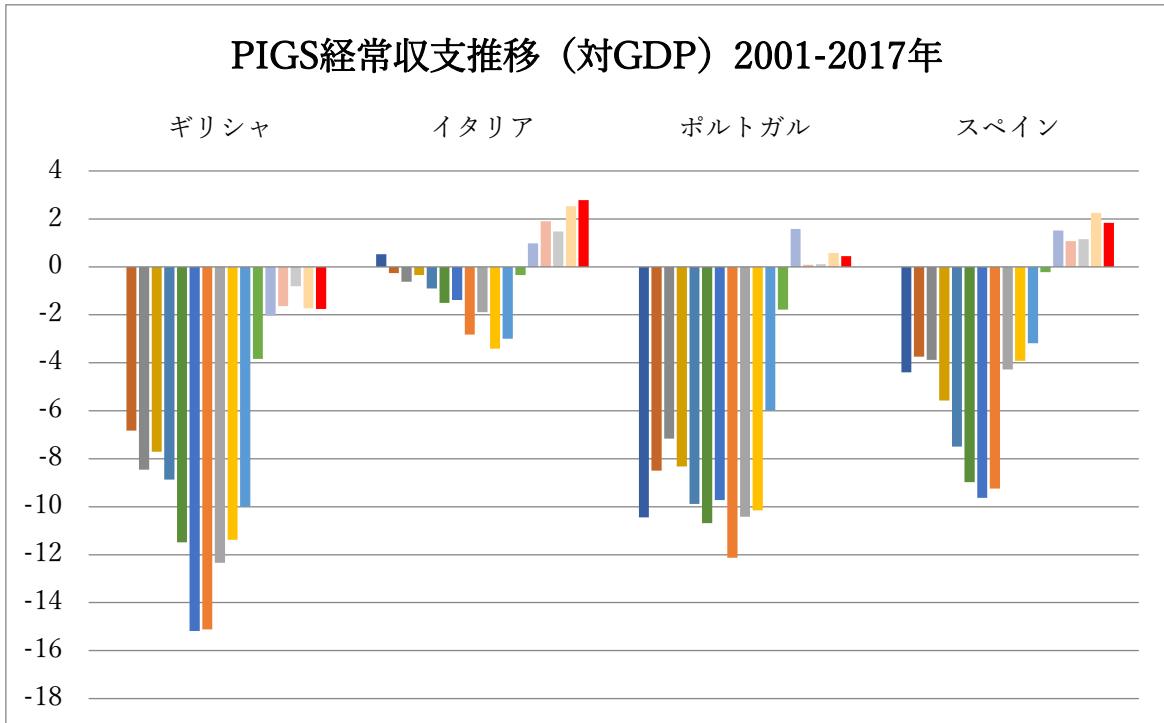


図 5



【ソブリンリスクの衝撃度】

図 6：主要国は 2009 年の世界金融恐慌を短期間で切り抜け、成長軌道に一応復帰。ギリシャとの対比でもあきらか。

図 7：ギリシャは GDP の絶対水準でも、危機以前を大きく下回ったまま。

図 8：政府財政赤字は、ドイツ・ギリシャ！を除くと赤字解消出来ず。金融恐慌以前の水準を大きく下回る。

図 9：経常収支も黒字国、赤字国の顔ぶれが固定化。

図 10：累積公的債務の対 GDP 比では、日本が圧倒的な債務を負っておりギリシャすら大きく引き離す。これだけ見れば国債ディフォルトリスクは、日本→ギリシャ→米→仏→英→独の順番。日本資本主義=アベノミクス危うし！

図 11：失業率はギリシャを別格として、フランスを除くと金融恐慌以前よりも改善している。その中でも日本は一段と低い。アベノミクス、サイコー！ドイツは金融恐慌以前から一貫して低下。フランスは金融恐慌以降高止まりしたまま。

図 12：15-24 才若年層失業率はどこの国でも全層よりも高いが、EU 圏ではギリシャを別格としてフランス・イギリスの状況がよくないのか。若年層と高齢者との間の断絶・軋轢が高まる。

図 13：移民流入数。ドイツへの流入数がこの数年間で急増し、絶対数でもアメリカに迫るほど。移民政策をめぐってメルケル首相は失脚、母体のキリスト教民主同盟の次期党首選

には不出馬を表明。排外主義政党が一躍進出。「ドイツの選択」

英仏にも年間 20 万—30 万人がコンスタントに流入。人口比で言えば 4 億人近いアメリカをはるかに上回る。

図 14 : 15-65 才労働人口の推移に移民流入の累積が反映されている。イギリスがこの面で一番深刻なのか、これだけで Brexit ! というわけだ。

図 15 : 対 GDP 比政府財政支出ではフランスだけが突出した高水準のところで高止まり。

失業率の高まりの中での、財政均衡化を目指すならば一層の失業者の排出、政府サービスの低下、増税への強反発 etc。黄色のベスト。行くも地獄、退くも地獄、マクロン君危うし！

固有の伝統と歴史・文化を備えた複数の国家の主権を生かしたまま、理想に走って作り上げられた連邦国家としての EU、そこへのユーロという統一通貨の導入という制度設計の失敗が、移民問題という外生的ショックも加わって、いたるところで火を噴いている。イギリスは自国通貨ポンドを手放さず、いいところ取りを狙って EU に参加したが、自らの主権へのブラッセルからの干渉と移民流入問題で、メリット見出し難くなり Brexit へ突き進もうとしているが、足並みの乱れは覆いがたい。

一体行きつく先は EU の解体なのか、再編なのか…

図 6

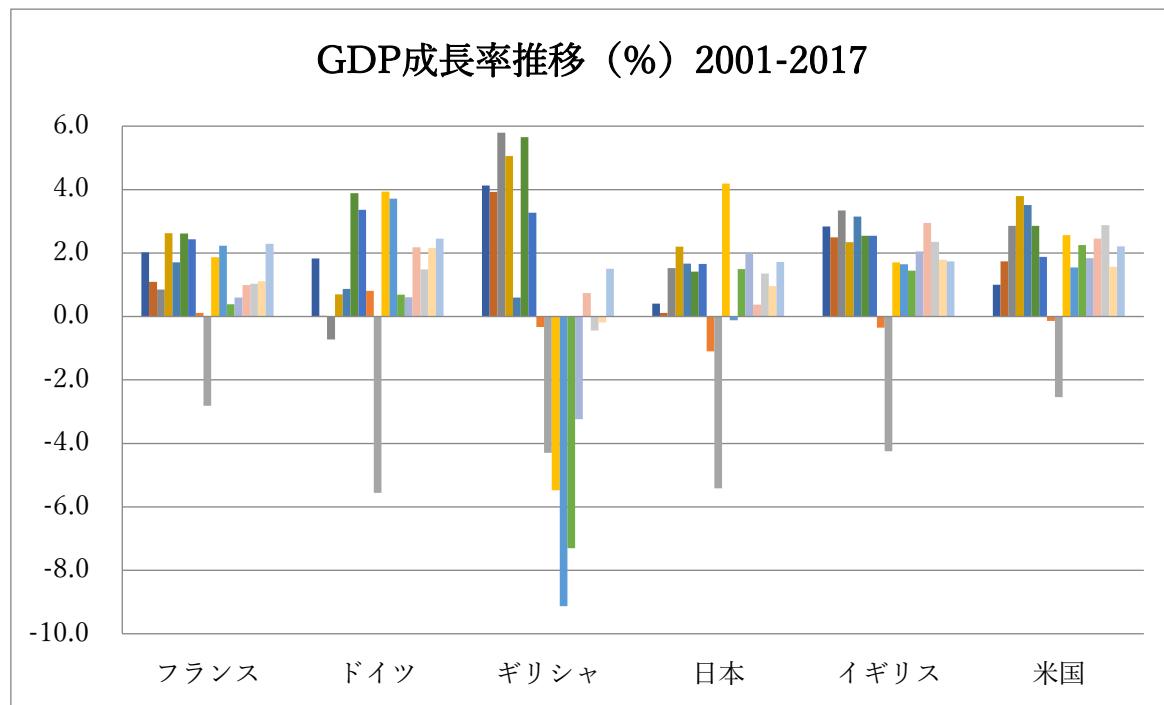


図 7

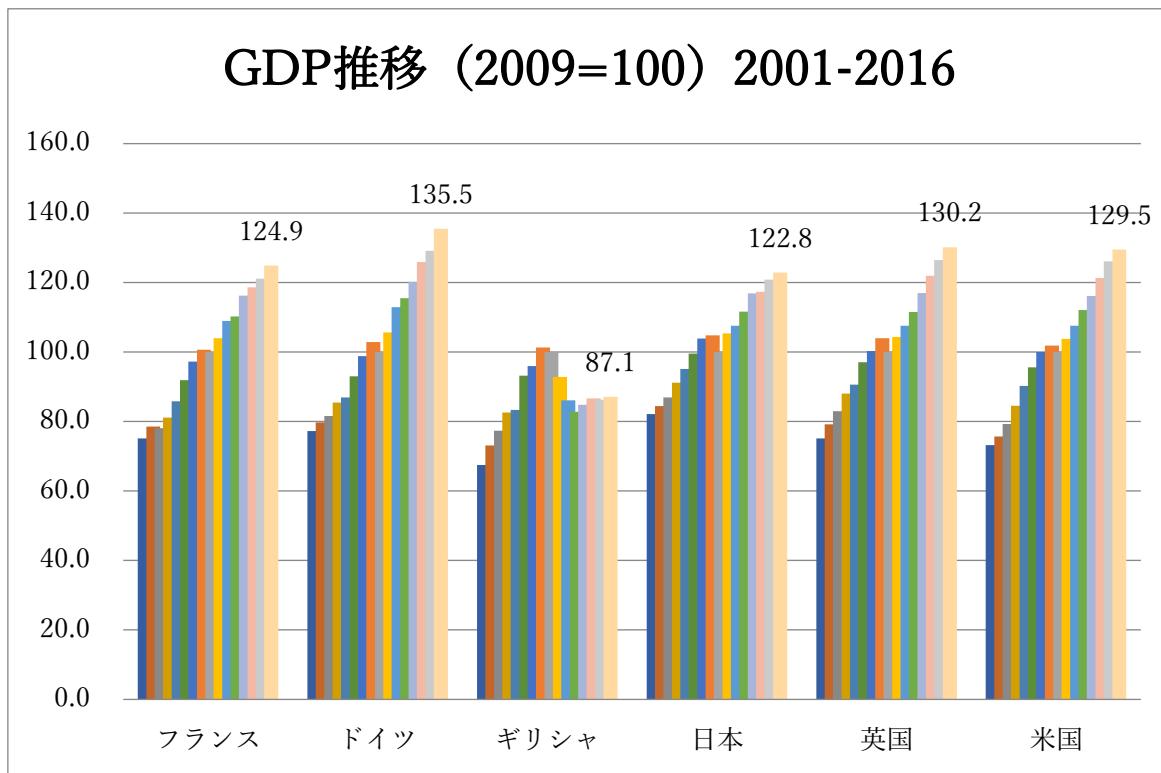


図 8

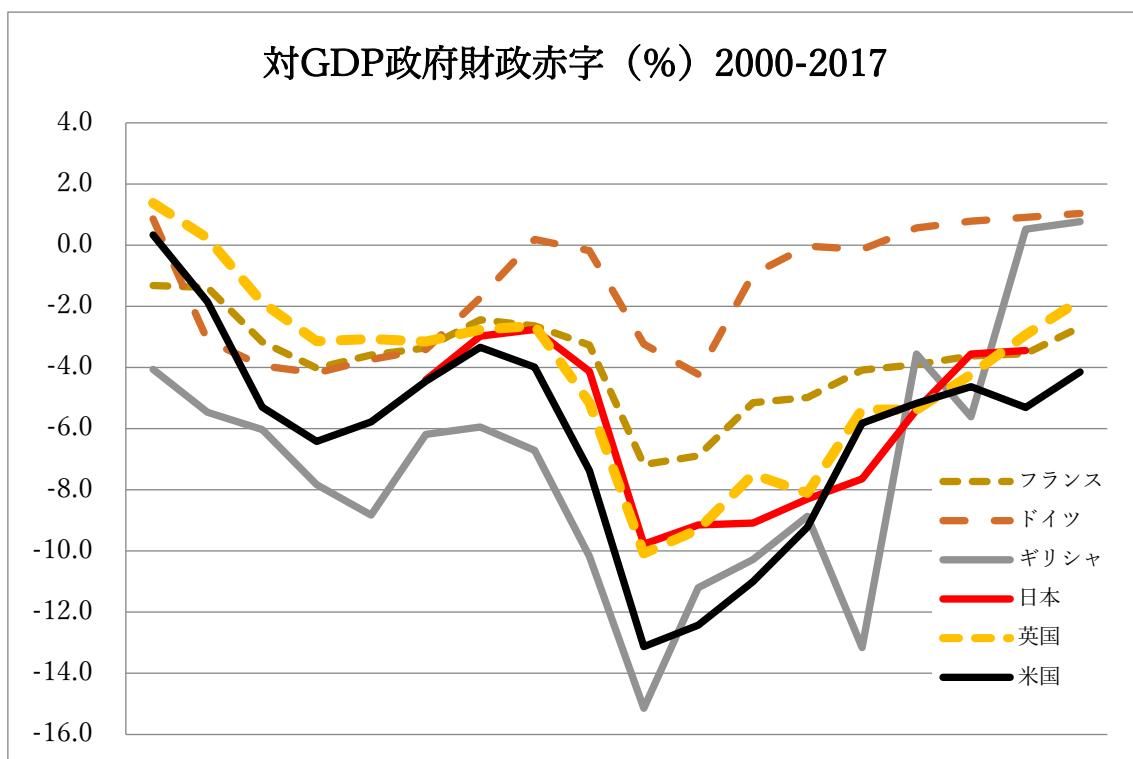


図9

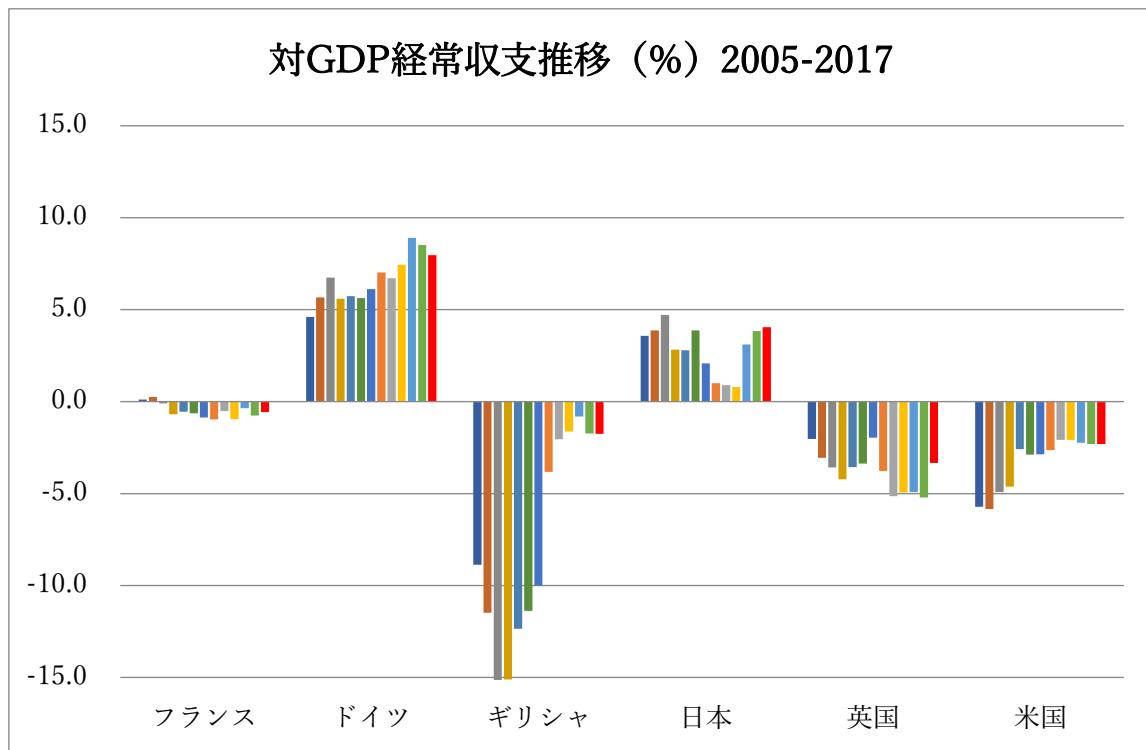


図10

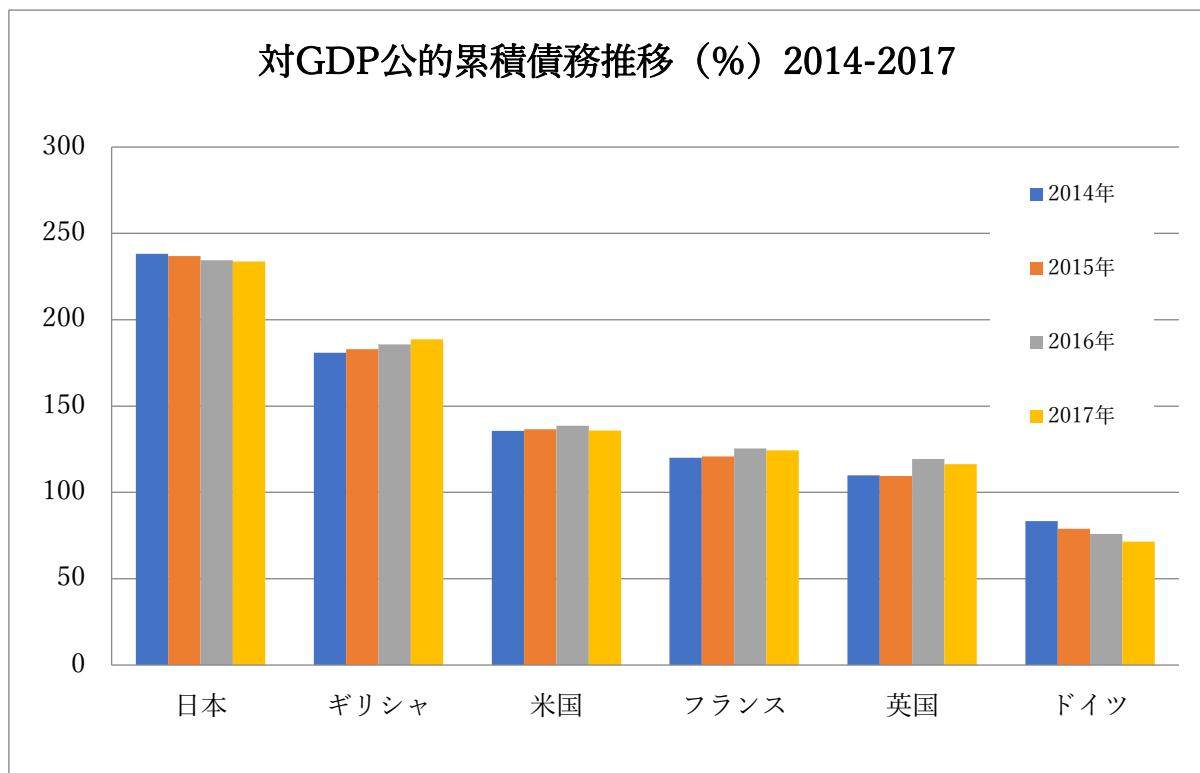


図 11

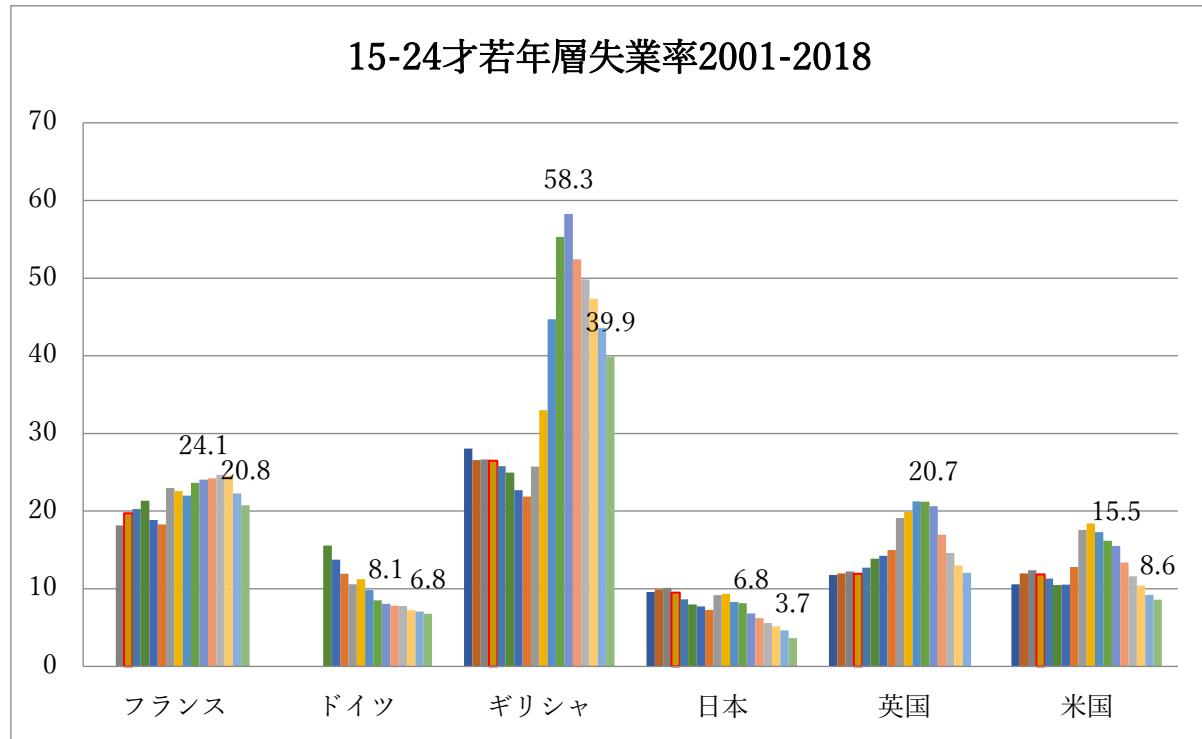


図 12

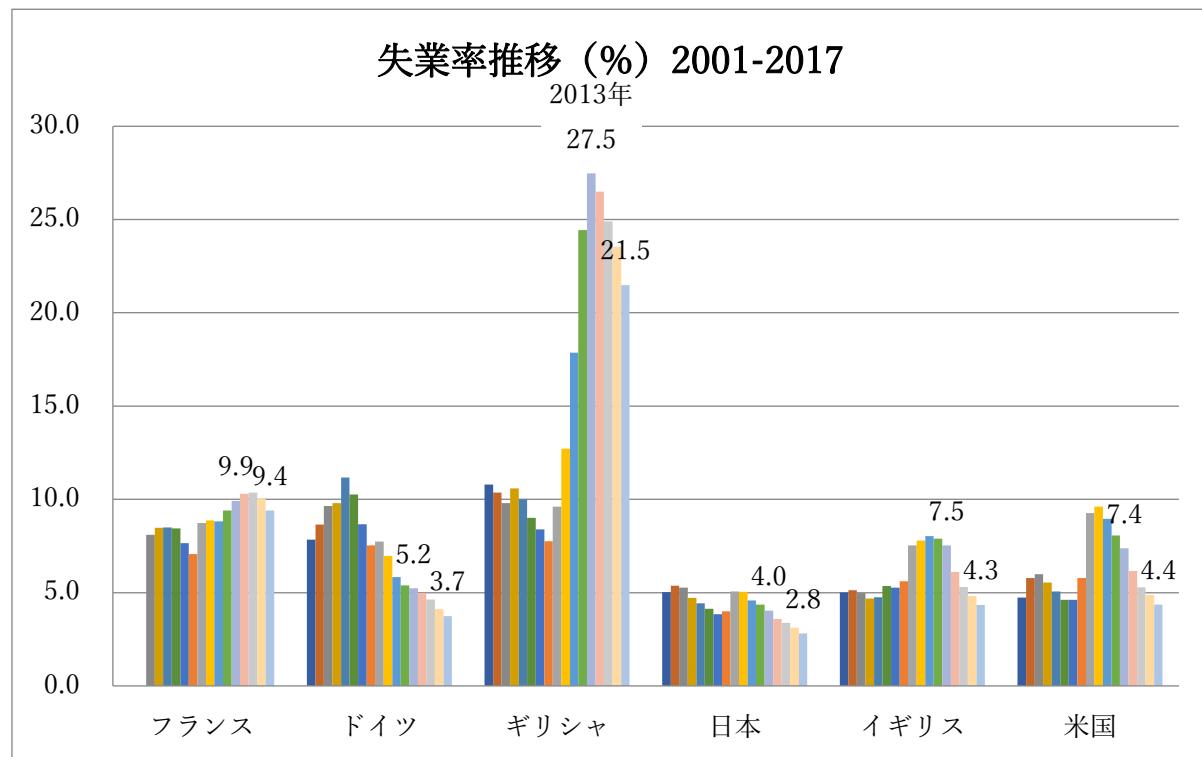


図 13

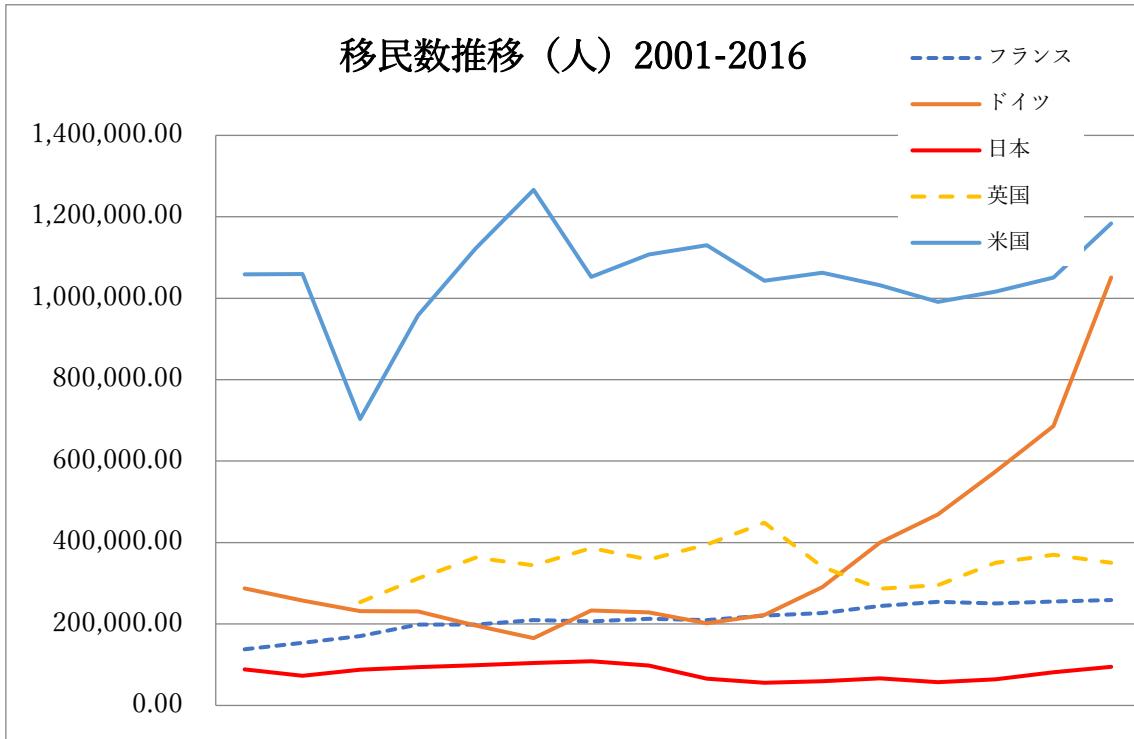


図 14

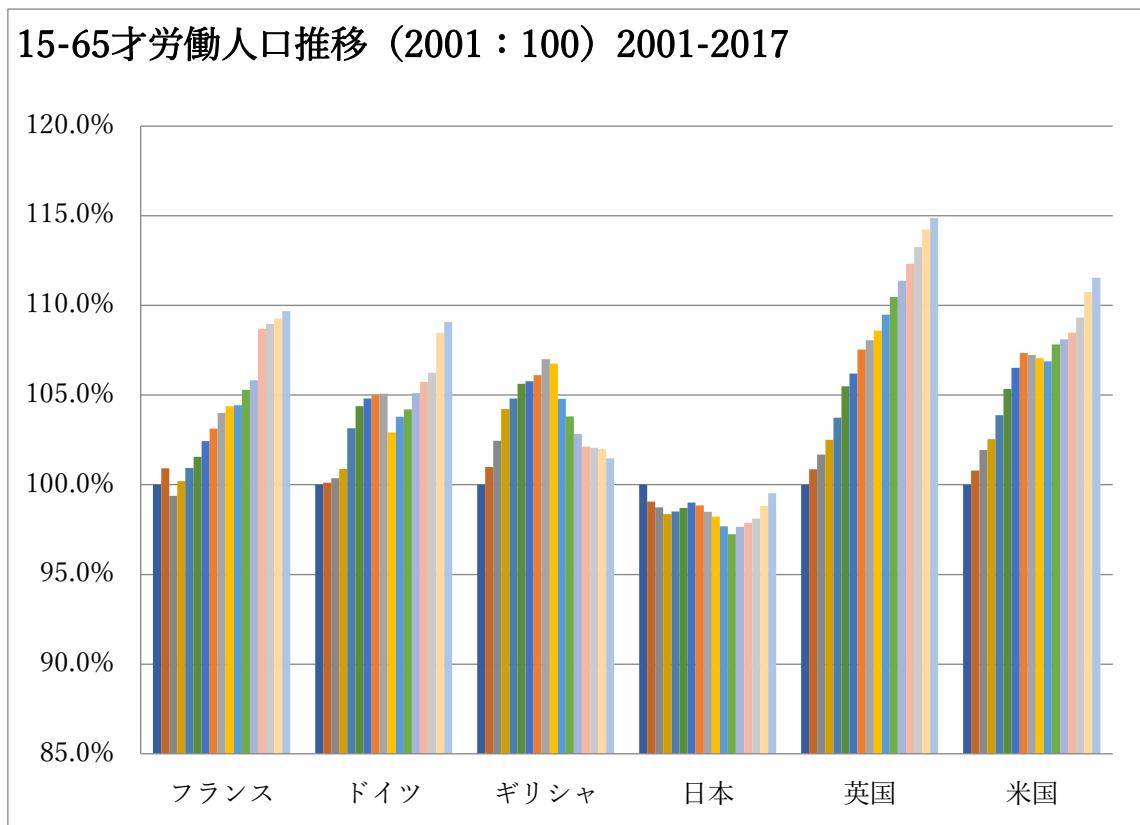


図 15

